

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K01359

研究課題名(和文) 乳幼児の児童虐待事件における医学的証拠のあり方をめぐる総合的検討

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on Medical Evidence in Alleged Infant and Child Abuse Cases

研究代表者

笹倉 香奈 (Sasakura, Kana)

甲南大学・法学部・教授

研究者番号：00516982

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は乳幼児の虐待事案・死亡事案の刑事手続における医学的証拠のあり方について、法学的・医学的観点から総合的に検証し、医学的意見・医学的証拠の作成および医学的証拠の法廷への顕出のあり方を検討した。刑事事件における医学的証拠の作成プロセスの適正化の重要性が改めて浮き彫りにされたとともに、医師が専門領域の範囲内で意見を述べることの重要性や、多領域の専門家による最新の科学的な研究成果を踏まえた多角的な検討の必要性が明らかになった。本研究は、国内における乳幼児の虐待事案の医学的証拠のあり方に関する議論に貢献したのみならず、国際的な議論の発展にも影響を与えることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

乳幼児虐待の中でも特に注目を集めている「乳幼児揺さぶられ症候群(SBS)」および「虐待による乳幼児頭部外傷(AHT)」の事案では、医学的判断や証拠が一部の医師の「虐待防止」を絶対視する価値観に支配され、「虐待ありき」の結論を短絡的に導いてきた。医学的証拠が裁判に提出され、誤判・冤罪の原因となったことも指摘されている。本研究の開始後も連続して多数のSBS/AHT事件で無罪判決が確定した。本研究はこれらの事案における医学的証拠の形成プロセスや法廷への顕出のあり方(鑑定意見書や証言のあり方)を検討し、適正化するための方策を提言するもので、誤判・冤罪を防ぎ、科学的な虐待診断・判断を行うことに貢献する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to comprehensively examine the topic of medical evidence in criminal proceedings, especially in infantile abuse cases, from legal and medical perspectives. It examined how medical opinions and medical evidence should be developed and brought into courtroom as evidence. The significance of proper process of producing medical evidence was highlighted. The importance of experts giving opinions within the scope of their areas of expertise and the need for multidisciplinary discussion and review by experts based on latest scientific research findings was also emphasized. This study not only contributed to the domestic debate on the problem of medical evidence in criminal proceedings, but also has an impact on the development of international discussions.

研究分野：刑事訴訟法

キーワード：乳幼児揺さぶられ症候群(SBS) 虐待による乳幼児頭部外傷(AHT) 誤判・冤罪 刑事裁判 医学的証拠
科学的証拠 児童虐待 適正手続

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本では児童虐待事件への社会の関心が **2000** 年代以降に急激に高まり、それとともに刑事的対応や刑事司法関与のあり方に関する議論も近年活発化した。虐待事案における多機関連携、子どもへの事情聴取の際の司法面接的手法の活用、子どもの死因究明などについては、**2015** 年頃より研究や実践が進んだ。他方で、児童虐待事件の中でも乳幼児の事案や死亡事案については、とりわけ刑事的対応が困難で、他の虐待事案とは異なった観点からの対応が必要であるとされている。これらの事案では、自ら語ることでできない子どもへの事情聴取ができず、事案の性質上、通常の捜査で用いられる **DNA** 鑑定などの手法を使うことができない。そこで、医学的証拠が虐待か否かを判断するために決定的な意味を持つとされてきたのである。とくに子どもの体表には傷がないのに頭蓋内に出血などがある事案では、しばしば医学的な意見がほぼ唯一の証拠とされてきた。

乳幼児虐待事案の中でも特に近時注目を集めたのが、「揺さぶられっ子症候群 (**Shaken Baby Syndrome**, 以下 **SBS**)」あるいは「虐待による乳幼児頭部外傷 (**Abusive Head Trauma**, 以下 **AHT**)」の事案であった。**SBS** は、乳幼児の頭部を大人が揺さぶったとされる事案で、**AHT** は揺さぶり以外の機序も含め、虐待によって乳幼児の頭部に外傷を与えたとされる事案である。**SBS/AHT** については、日本でも **2010** 年前後から捜査・訴追例が急増した。他方で、**SBS** 事件の訴追・裁判には、虐待問題を専門とする一部の医師による鑑定が大きく寄与しているが、その鑑定や証言のあり方に大きな問題があることが近年、指摘されてきた。

SBS/AHT の診断・判断の背景にあるのは、いわゆる「**SBS** 理論」である。「三徴候(硬膜下血腫、網膜出血、脳浮腫)があれば、体表に外傷がなくとも子どもが揺さぶられて虐待されたと考え」というものである。実際には「三徴候」は低位からの転倒や落下、内因性の疾患など他の様々な原因によって生じ得るにもかかわらず、これらの事件における医学的な判断や証拠は一部の医師の「虐待防止」を絶対視する価値観に支配され、「虐待」があったとの結論を短絡的に導いてきた。そして、このような医学的証拠が裁判に提出され、そのことによって誤判・冤罪事例が相当数あることが指摘されていた。これらの事案における、医学的意見・証拠の形成プロセスや法廷への顕出のあり方(鑑定意見書や証言のあり方)も問題視されてきた。

研究代表者は、**SBS** が疑われた事件で多数の誤判・冤罪事例がある可能性が高いにもかかわらず、日本では検証がされていないことに強い危機意識を抱き、**2017** 年に刑事弁護の実務家らや分担者の徳永などとともに「**SBS** 検証プロジェクト」を立ち上げ、文献調査や海外調査などの基礎的な研究を行っていた。その中で、脳神経外科を中心とする医師の中にも **SBS/AHT** 事件における虐待診断の行き過ぎや、医学鑑定のガイドラインが存在しないために医師によって鑑定の結論が異なるという事態への懸念があることが明らかになった。法学・医学の双方の観点を踏まえた学際的な研究の必要性は明らかであった。そこで、**2019** 年初頭には、現在の虐待判断や医学的証拠のあり方について同じ問題意識をもつ朴、桼中、小保内ら医学研究者らとともに「小児頭部外傷研究会」を立ち上げ、研究を進めていた。このような中、医学的証拠の作成・法廷への顕出過程の諸問題が浮かび上がり、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、乳幼児の虐待事案・死亡事案の刑事手続における医学的証拠のあり方について、法学的・医学的観点から総合的に検討することである。このような目的のために、刑事手続において医学的証拠が問題となる **2** つの局面を扱い研究を進めた。

第1に医学的意見・医学的証拠の作成、第2に医学的証拠の法廷への顕出である。刑事手続の各段階における医学的証拠の作成の標準化、証言の法廷への顕出のあり方を法学的・医学的な観点から総合的に検討することが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

本研究は、主として、国内外の研究・実践に関連する文献調査や実態調査、医学的証拠に関連する多領域の専門家の研究会を通じた意見交換によってすすめられた。新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて海外での現地調査や、対面での研究会をすることは難しかったものの、オンライン・ツールを用いることによって研究を円滑に進めることができた。

初年度(**2020** 年度)は、乳幼児の虐待が疑われる事案における医学的証拠のあり方について、国内外の法律上の規律や医学上のガイドラインの現状を確認するための文献調査および実態調査を行った。「**SBS** 検証プロジェクト」の法実務家および研究代表者と分担者らが中心的メンバーとして活動する「小児頭部損傷研究会」の医師の協力を得ることができ、実際に **SBS/AHT** 事件に関わった医学専門家および法実務家への意見聴取を行うことにより、日本の現状と課題を正確かつ網羅的に把握することができた。代表者・分担者それぞれが論文や学会報告の形で成果

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

を公表した。アメリカやヨーロッパ各地の研究者と情報を交換することで文献・事例の収集や実態の把握なども行った。また、代表者および分担者が中心となり、多数の多領域の専門家が参加する「小児頭部損傷研究会」を2020年12月と2021年3月に開催した。分担者の埜中は「脳静脈洞血栓症と虐待による頭部外傷との鑑別が問題となった乳児例」、分担者の徳永は「刑事裁判における新しい科学的理論・証拠の取扱いについて」と題する研究報告を行った。

2021年度は、以上の実態調査で明らかになった日本の医学的証拠の問題点に関連して、医学的意見・医学的証拠の作成と、医学的証拠の法廷への顕出という段階それぞれについて、英米を中心とする各国の文献および実務の実態調査を行った。新たな動向として、民事の医療訴訟における「カンファレンス鑑定」や、オーストラリアなどの専門訴訟で採用されている「コンカレント・エビデンス方式」を日本の刑事裁判でも採用すべきであるとの議論が出現していることから、それらの議論に関する文献調査と検討を行い、代表者において論文として公表した。

多分野の研究者・実務家が集まる「小児頭部損傷研究会」も引き続き開催した。2021年度は6月、9月、12月、3月の4回にわたって開催し、各回とも60名から100名を超える参加者を得て、本研究の課題に関連する諸問題について活発な議論を行うことができた。

最終年度である2022年度は、以上の成果をふまえ、乳幼児の児童虐待事件における医学的証拠のあり方に関する総括的な検討を行った。6月、9月、12月には「小児頭部損傷研究会」を開催し、各回とも多数の参加者を得ることができたほか、総括的なシンポジウムを2023年3月に開催し、医学的証拠のあり方に関する問題提起を行った。

4. 研究成果

本研究で扱った第1の問題は、乳幼児の頭部外傷事案において、虐待か否かの判断をどのように行うべきか、医学的証拠の作成プロセスはどうあるべきかというものであった。当初、本研究では、虐待か否かの判断を行う際のガイドラインを医学的検討によって提案するとともに、その判断にもとづき医師が刑事事件の証拠を作成する際のプロセスのあるべき姿についても具体的に提案することを目指した。については、最終的なガイドラインの策定は困難であることが明らかになったものの、現在、虐待判断の現場で用いられている厚生労働省「子ども虐待対応の手引き」(2014年改訂)に関して、SBS/AHTについて記述する部分の問題点を仔細に検討することができた。代表者が共編著者となり、分担者の徳永が分担著者となった一般市民向けのブックレット『赤ちゃんの虐待えん罪：SBS(揺さぶられっ子症候群)とAHT(虐待による頭部外傷)を検証する！』(現代人文社、2023年)で、この検討の成果を公表した。については、結局のところ、刑事裁判において医学的証拠の作成プロセスの適正化を目指すことの重要性が改めて明らかになった。医師が専門領域の範囲内での意見を述べることの重要性や、多領域の専門家による最新の研究成果を踏まえた多角的な検討の必要性が浮き彫りにされた。このような問題意識を踏まえ、代表者はSBS/AHTの問題について諸外国の研究者らとの共同研究を行い、様々な国から多領域の研究者で多角的にこの問題点を指摘する国際共編著の出版を実現することができた。

第2の問題は、医学的知見の法廷への顕出のあり方であった。本研究では「カンファレンス鑑定」や「コンカレント・エビデンス方式」などの検討を通して検討を行ったが、結局のところ、刑事裁判の分野においては、従来の反対尋問による検討が最善の顕出方法であり、有効な反対尋問を可能とするための、被告人側への専門家の援助の仕組みなどを構築することが必要ではないかとの結論が得られた。

以上のとおり、本研究は、国内における乳幼児の虐待事案の刑事手続における医学的証拠のあり方についての議論に貢献したのみならず、国際的な議論の発展にも影響を与えることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計28件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 秋田真志・村井宏彰・笹倉香奈	4. 巻 111
2. 論文標題 最新刑事判例を読む・評釈 SBS/AHT事案で相次ぐ無罪判決	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊刑事弁護	6. 最初と最後の頁 118-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masahiro Nonaka, Akio Asai	4. 巻 65(3)
2. 論文標題 Abusive Head Trauma in Infants and Children in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 J Korean Neurosurg Soc	6. 最初と最後の頁 380-384
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3340/jkns.2021.0285	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nobuyuki Akutsu , Masahiro Nonaka , Ayumi Narisawa, Nobuyuki Akutsu , Mihoko Kato , Atsuko Harada, Young-Soo Park	4. 巻 17(2)
2. 論文標題 Infantile subdural hematoma in Japan: A multicenter, retrospective study by the J-HITS (Japanese head injury of infants and toddlers study) group	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PLoS One	6. 最初と最後の頁 e0264396
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1371/journal.pone.0264396	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ayumi Narisawa, Masahiro Nonaka , Nobuyuki Akutsu , Mihoko Kato , Atsuko Harada, Young-Soo Park	4. 巻 17(11)
2. 論文標題 Unexplained mechanism of subdural hematoma with convulsion suggests nonaccidental head trauma: A multicenter, retrospective study by the Japanese Head injury of Infants and Toddlers study (J-HITS) group	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PLoS One	6. 最初と最後の頁 e0277103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1371/journal.pone.0277103	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mihoko Kato, Masahiro Nonaka, Nobuyuki Akutsu, Ayumi Narisawa, Atsuko Harada, Young-Soo Park	4. 巻 18(3)
2. 論文標題 Correlations of intracranial pathology and cause of head injury with retinal hemorrhage in infants and toddlers: A multicenter, retrospective study by the J-HITs (Japanese Head injury of Infants and Toddlers study) group	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 PLoS One	6. 最初と最後の頁 e0283297
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0283297	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 31号
2. 論文標題 SBS/AHTと刑事裁判：乳幼児揺さぶられ症候群と虐待による頭部外傷をめぐる議論の現状	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 犯罪と刑罰	6. 最初と最後の頁 157-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 2141
2. 論文標題 連載：冤罪を考える(10) 児童虐待と冤罪(3)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 時の法令	6. 最初と最後の頁 115-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 2139
2. 論文標題 連載：冤罪を考える(9) 児童虐待と冤罪(2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 時の法令	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 2135
2. 論文標題 連載：冤罪を考える(8) 児童虐待と冤罪(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 時の法令	6. 最初と最後の頁 71-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 3
2. 論文標題 供述の心理学的評価方法：その到達点と課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 冤罪白書2021	6. 最初と最後の頁 196 - 203
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 2125
2. 論文標題 連載・冤罪を考える(5) アメリカの誤判・冤罪とイノセンス運動(3)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 時の法令	6. 最初と最後の頁 45-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 2123
2. 論文標題 連載・冤罪を考える(4) アメリカの誤判・冤罪とイノセンス運動(2)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 時の法令	6. 最初と最後の頁 34-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 2121
2. 論文標題 連載・冤罪を考える(3) アメリカの誤判・冤罪とイノセンス運動(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 時の法令	6. 最初と最後の頁 64-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 2119
2. 論文標題 連載・冤罪を考える 日本の誤判・冤罪(2)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 時の法令	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Young Soo Park	4. 巻 65(3)
2. 論文標題 Complex Pathophysiology of Abusive Head Trauma with Poor Neurological Outcome in Infants	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Korean Neurosurgical Society	6. 最初と最後の頁 385 - 396
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akutsu Nobuyuki, Nonaka Masahiro, Narisawa Ayumi, Kato Mihoko, Harada Atsuko, Park Young-Soo	4. 巻 17
2. 論文標題 Infantile subdural hematoma in Japan: A multicenter, retrospective study by the J-HITS (Japanese head injury of infants and toddlers study) group	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 0264396 ~ 0264396
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0264396	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳永光	4. 巻 108
2. 論文標題 科学的証拠の証拠能力	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊刑事弁護	6. 最初と最後の頁 23-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 証人尋問、当事者主義と心理学 (特集 心理学と法学の止揚の可能性)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法と心理	6. 最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 86(2)
2. 論文標題 乳幼児揺さぶられ症候群(SBS)とその歴史 (特集 乳幼児揺さぶられ症候群(SBS))	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医療判例解説	6. 最初と最後の頁 2-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 103
2. 論文標題 乳幼児揺さぶられ症候群(SBS)をめぐる議論の現在地 (特集 乳幼児揺さぶられ症候群(SBS)事件の現在地)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊刑事弁護	6. 最初と最後の頁 53 - 59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 178
2. 論文標題 乳幼児揺さぶられ症候群による"冤罪(えんざい)"防げ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 公明	6. 最初と最後の頁 57-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 105
2. 論文標題 司法面接の現状と刑事弁護上の注意点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊刑事弁護	6. 最初と最後の頁 151-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 2117
2. 論文標題 連載・冤罪を考える 日本の誤判・冤罪(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 時の法令	6. 最初と最後の頁 41-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹倉香奈	4. 巻 2119
2. 論文標題 連載・冤罪を考える 日本の誤判・冤罪(2)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 時の法令	6. 最初と最後の頁 43 - 48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Park Young-Soo, Kogeichi Yohei, Haku Takahide, Kim Tae Kyun, Yokota Hiroshi, Nakagawa Ichiro, Motoyama Yasushi, Nakase Hiroyuki	4. 巻 37
2. 論文標題 Hinge and floating decompressive craniotomy for infantile acute subdural hematoma: technical note	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Child's Nervous System	6. 最初と最後の頁 295 ~ 298
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s00381-020-04942-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小保内俊雅	4. 巻 23
2. 論文標題 乳幼児突然死症候群と睡眠 (特集 子どもの睡眠と発達脳,そしてその障害)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 外来小児科	6. 最初と最後の頁 226 - 232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小保内俊雅	4. 巻 52 (5)
2. 論文標題 学校管理下で発生する死亡事案	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小児内科	6. 最初と最後の頁 699-701
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小保内俊雅	4. 巻 39
2. 論文標題 Child Death Reviewを東京で実施するために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京小児科医会報	6. 最初と最後の頁 3-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Young-Soo PARK (朴 永銖), Nobuyuki Akutsu, Ayumi Narisawa, Atsuko Harada, Mihoko Kato, Masahiro Nonaka
2. 発表標題 Analysis of infantile subdural hematoma based on a nationwide multicenter retrospective study in Japan
3. 学会等名 The 48th Annual Meeting of the International Society for Pediatric Neurosurgery (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Young-Soo PARK (朴 永銖)
2. 発表標題 Various problems related to infantile subdural hematoma mainly in abusive head trauma
3. 学会等名 The 62nd Annual Meeting of the Korean Neurosurgical Society (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笹倉香奈
2. 発表標題 SBS/AHTとえん罪
3. 学会等名 第45回 日本脳神経外傷学会・特別企画「虐待による小児頭部外傷（AHT）に関する諸問題（招待講演）」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kana Sasakura
2. 発表標題 The Problem of Value-based Child Abuse Research and Prevention: Shaken Baby Syndrome Paradigm and its Consequences
3. 学会等名 Asian Criminological Society (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Young Soo Park
2. 発表標題 Current topics on abusive head trauma in children
3. 学会等名 The 28th Federation Meeting of Korean Basic Medical Scientists (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朴永録
2. 発表標題 虐待による乳幼児硬膜下血腫の特徴と重症化する病態
3. 学会等名 第80回日本脳神経外科学会学術総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朴永録
2. 発表標題 小児重症頭部外傷に対する手術治療と術後管理における要点
3. 学会等名 第30回脳神経外科手術と機器学会 (CNTT)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朴永録
2. 発表標題 虐待による頭部外傷は何故重症化するのか？
3. 学会等名 第49回日本小児神経外科学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朴永鉢
2. 発表標題 小児重症脳損傷に対する治療限界を考える 子どもたちの脳の可塑性を信じて
3. 学会等名 第34回日本小児救急医学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 朴永鉢
2. 発表標題 乳幼児頭部外傷手術における吸収性プレートの有用性
3. 学会等名 第45回日本脳神経外傷学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 朴永鉢
2. 発表標題 虐待による乳幼児急性硬膜下血腫が重症化する病態 広範な大脳半球の LDA は何を意味するのか？
3. 学会等名 第48回 日本小児神経外科学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 朴永鉢
2. 発表標題 虐待による乳児急性硬膜下血腫、頭部CTにての広範囲LDAは何を意味するのか？
3. 学会等名 第44回 日本脳神経外傷学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 壘中正博, 宮田真友子, 浅井昭雄
2. 発表標題 乳幼児期における硬膜下血腫の受傷機転
3. 学会等名 第48回日本小児神経外科学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 Edited by Keith A. Findley, Cyrille Rossant, Kana Sasakura, Leila Schneps, Waney Squier, Knut Wester	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 464
3. 書名 Shaken Baby Syndrome: Investigating the Abusive Head Trauma Controversy	

1. 著者名 秋田真志、古川原明子、笹倉香奈	4. 発行年 2023年
2. 出版社 現代人文社	5. 総ページ数 124
3. 書名 赤ちゃんの虐待えん罪：SBS(揺さぶられっ子症候群)とAHT(虐待による頭部外傷)を検証する！	

1. 著者名 後藤 昭、安部祥太、角田雄彦、笹倉香奈、緑 大輔	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 432
3. 書名 裁判員時代の刑事証拠法 (笹倉香奈「医学的証拠の法廷への顕出のあり方について」)	

1. 著者名 荒木尚 編著 / 横田裕行 監修 / 三木保 監修 / 間瀬光人 監修	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中外医学社	5. 総ページ数 268
3. 書名 小児頭部外傷の診断と治療 (朴永銖「虐待による頭部外傷 (abusive head trauma: AHT)」)	

1. 著者名 福井 次矢	4. 発行年 2020年
2. 出版社 医学書院	5. 総ページ数 2192
3. 書名 今日の治療指針 2020年版 [ポケット判]	

1. 著者名 水口 雅、山形 崇倫	4. 発行年 2021年
2. 出版社 南山堂	5. 総ページ数 912
3. 書名 クリニカルガイド小児科	

1. 著者名 中田 誠一、千葉 伸太郎、宮崎 総一郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 全日本病院出版会	5. 総ページ数 333
3. 書名 小児の睡眠呼吸障害マニュアル 第2版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小保内 俊雅 (OBONAI TOSHIMASA) (20385412)	東京女子医科大学・医学部・助教 (32653)	
研究分担者	徳永 光 (TOKUNAGA HIKARU) (20388755)	獨協大学・法学部・教授 (32406)	
研究分担者	朴 永銖 (PARK YOUNG-SOO) (80364066)	奈良県立医科大学・医学部・病院教授 (24601)	
研究分担者	埜中 正博 (NONAKA MASAHIRO) (90577462)	関西医科大学・医学部・教授 (34417)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Asian Criminological Society	開催年 2021年～2021年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------